2023年4月9日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書16章1～8節
タイトル：先立つ主イエス

ご一緒に「主のご復活」をお祝い出来ること、感謝致します。

教会の本棚に「キリストと出会う」という本がありました。色々な方が、どのようにしてキリストに出会ったかが書かれていましたが、印象的だったのは、先日召された加賀乙彦という方の話でした。既に信仰には惹かれておられたようですが、洗礼を受けるかどうか迷っていた時、神父さんに相談したら「あなたがキリスト教とイエスについて抱いている疑問を、すべて私にぶつけてごらんなさい」と言われ、3日間、朝から晩までずっと疑問をぶつけたそうです。3日目に「もう質問することがなくなった」と思った時、曇っていた空が裂けて、日差しが庭をパッと明るくしたかと思ったら、光が心の奥底まで照らし、心も体も軽くなってフワフワ浮き上がるような気がしたそうです。彼は神父さんに言いました。「何だか、気持ちがすっかり軽くなりました。嬉しくてなりません」。それを聞いた神父さんが、「洗礼を受けて良いですよ」と言ったそうです。それがキリストとの出会いだったと書いてありました。イエス様が生きて、働いておられますから、私達も色々な出会いを経験させて頂けるのだろうと思うことでした。

今日の箇所は、イエス様の復活の箇所です。イエスは金曜日の午後3時頃、十字架上で息を引き取られました。ユダヤの1日は、日没から始まります。安息日(土曜日)の始まりが3時間後に迫っていました。アリマタヤのヨセフの配慮によって、イエス様は応急処置のような埋葬の処置を受けて、ヨセフの墓に葬られました。「15章47節」には「マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスの納められる所をよく見ていた」(マルコ15:47)と記されています。その女性達が16章にも登場します。「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。そして、週の初めの日の早朝、日が上ったとき、墓に着いた」(16:1～2)。女性達の名前が繰返し記されているのは、証人の名前をしっかりと記して、「確かにイエスは十字架で死なれた。葬られた。しかし、その死なれた、葬られたイエスが、確かに復活されたのだ」ということを伝えたいからだと思います。

彼女達は、土曜日の日没後、安息日が終わるのを待って、店が開くとすぐに香油を買い求めたのでしょう。そして―(安息日が終わったと言っても、夜に墓に行っても真っ暗で何も出来ませんから)―日曜日、夜明けと共に墓に急いだのです。彼女達の切なる願いは「イエス様の体に香油を塗って丁寧に葬りたい」ということだけでした。だから墓の入口に大きな石が置かれていることも、行く途中で気づいた、そこまでは意識していなかったのだろうと思います。ところが墓に行ってみたら、すでに石は脇に転がしてありました。そして中に入ってみたら「真白な長い衣をまとった青年―(天使)」が居て、メッセージを伝えました。「十字架につけられたナザレ人イエス…はよみがえられました。ここにはおられません…行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会いできます』とそう言いなさい」(6～7)。

ところが、ここには、その次に「女性達は喜びに溢れて、万歳、万歳と言いながら墓を出て行った」とは書いていないのです。「墓…から逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していた…そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(8)とあるのです。私達には、なぜ彼女達が喜びに溢れたのではなかったか、なぜ恐怖に捕らえられたのか、はっきりとは分かりません。ただ、想像することは出来ます。

今は遺体を火葬にしますが、私の子供の頃は、まだ土葬でした。丸い桶型の棺(座棺)に遺体を座らせて、蓋を釘で打って、墓場に掘られた穴の中に埋めました。例えば、次の日に何かの理由で穴を掘って棺桶を開けてみたら、遺体が無くなっていたら、やはり恐れるでしょう。でも、彼女達の場合、それだけではなかったと思うのです。墓の入口の石について「あれほど大きな石だったのに、その石がすでにころがしてあった」(4)とあります。これは「神が石をころがして下さっていた」というこ

とを間接的に表現した言葉です。彼女達は「神の超自然的な働き」の世界に自分達が踏み込んだのを感じたのではないでしょうか。そして天使との出会い。「十字架で死んだイエスが甦った」とのメッセージを聞いたのです。そして実際に遺体がなくなっていたのです。死が打ち破られた、自分達の理解出来ないことが起こった、神がそれをされたのではないか。そのようなことを肌身に感じた時、喜びもあったかも知れないけれど、全身を揺さぶられるような衝撃、驚き―(ある種の恐れ)―に捕われたのではないでしょうか。

ある本にこんな話がありました。1 人の女の子が大きなバイクの近くで遊んでいました。ところが何かの拍子でそのバイクが彼女の上に倒れて来ました。バイクの部品が彼女の頭に食い込んでいるのが見えました。血が噴き出します。クリスチャンの両親は、助けを求めて神様に叫びました。「助けて下さい！」。女の子が病院に担ぎ込まれて検査を受けた後、医者が言いました。「お子さんが生きておられることは驚くべきことです。この傷があと髪の毛数本分深かったら、脳に穴が空いていたことでしょう」。少女は 13 針縫いましたが、その日の内に家に帰ることが出来たのです。両親は言っています。「私達は、主のご臨在と御力を経験して、絶対的な畏敬の念に打たれ、言葉を無くしていた」。本当に人間の思いを越えた神の御業に触れた時、私達は言葉を失うのかも知れません。しかも、人にとって絶対的なもの、もうどうしようもないもの、そう思われていた死が打ち破られたというのです。「驚きを越えた畏れ」が大きかったかも知れません。「ここに書いてある、女性達の『恐ろしかった』も、『畏れ―(畏敬の畏の「畏れ」)』 のニュアンスだ」とある学者は言います。

しかし、私達にとって重要なのは、「恐れの理由」よりも、8 節が「恐ろしかったからである」で終わっていることです。どういうことかというと、聖書をお持ちの方は、「マルコ福音書 16 章」を開いて頂くと、今日の箇所の次の箇所、16 章 9～20 節は〔かぎ括弧〕で括られているのがお分かりになると思います。なぜ〔かぎ括弧〕で括られているかというと、「この部分はおそらく『マルコが書いたオリジナル』にはなかったであろう。後からマルコの弟子によって―(あるいは初代教会の指導者か誰かによって)―書き足された部分であろう」という意味で〔かぎ括弧〕で括られているのです。(もちろん、「だから 9～20 節は大事でない」ということでは決してありません。神様の摂理の中で書き足され、「聖書の大事な言葉」として「マルコ福音書」に保存されたのです。だからこの部分も大切な聖書の御言葉です。しかし、オリジナルにはなかっただろうと思われます)。では、なぜ書き足されたかというと、8 節の「恐ろしかったからである」で「福音書」が終わるのは、「復活のイエス様が弟子達の前に現れる場面」がなければ、終わり方として落ち着きが悪いと思われたからでしょう。

しかし問題は、「なぜマルコは、8 節で自分の『福音書』を終えたのか」ということです。私達が読んでも、「恐ろしかったからである」で終わるのは落ち着きが悪い。ある人は「ルカが『ルカ福音書』と『使徒行伝』を自分の本の『前半』『後半』として書いたように、マルコも『後半』に当たる本を書こうとしていたのではないか」と考えます。そうかも知れません。あるいは、何らかの理由でこれ以上書けなかったのかも知れません。だから、そういう可能性も残した上で、しかし、もしマルコが 8 節で自分の「福音書」を終えようとしたのであれば、彼は何を意図したのでしょうか。どういう思いで、ここで自分の「福音書」を終えたのでしょうか。

それを考えるために、天使が語ったメッセージに注目したいと思います。天使は言いました。「行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会いできます』とそう言いなさい」(7)。この天使の言葉は、何を意味するのか。1 つは「イエスの甦りの意味」を示唆します。つまり、「お弟子たちとペテロに…言いなさい」、ペテロがこの天使のメッセージを聞いた時、どれだけ慰められたでしょうか。彼は、イエス様を裏切った、そのことにどれだけ苦しんでいたでしょうか。しかもイエスが本当に神から遣わされた方であったならば、その方をものの見事に裏切ってしまったのです、なおさらそうでしょう。しかし、甦ったイエス様は、そのペテロに真っ先に会おうとされました。つまりイエス様の十字架は、復活は、「裁き」のためではなく「赦し」のためであること、そのことを何よりも表しているのです。

しかし「イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会いできます」(7)とは、どういうことでしょうか。ガリラヤは、弟子達がイエス様と最初に出会った場所です。「その場所でイエス様との新しい関係が再び始まる」、そういう意味があったのではないでしょうか。しかし彼らが、イエス様との関係を改めて始めることにおいても、イエスが弟子達に先立って行かれるのです。だから、そこで弟子達はイエスにお会い出来るのです。それはガリラヤだけのことではない。この後の弟子達の歩みは、いつもイエスが先立って行かれ、そこで弟子達はイエスにお会いするのです。映画「クオ・ヴァディス」では、クリスチャン達に説得されて迷いながらローマから逃げて行くペテロは、街道の向こうからローマに向かって近づいてくる太陽の輝きの中を歩いておられるイエス様に出会います。ペテロはイエス様の足を抱くようにして言います。「主よ。どこにおいでになるのですか」。イエスは言われます。「あなたが私の民を捨てる時、私は再び十字架にかけられるためにローマに行く」。ペテロは、起き上がると、踵を返してローマに向かって歩き始めるのです。そしてローマのクリスチャン達に、イエス様にお会いしたことを語り、皆を励まし続けるのです。これはフィクションですが、そういう出会いが色々な形であったのではないでしょうか。「ガリラヤへ行け、そこでお会い出来る」というのは、そういうことが意図されているのではないでしょうか。

なぜマルコは、途中で終わるような形で自分の「福音書」を終えたのか。それは、これから弟子達の前に現れて下さるイエス様のこと、いやこれから弟子達に先立って行かれるイエス様のことを、これ以上、自分の小さな本に書くことが出来なかったからではないでしょうか。女性達は、落ち着いてから、弟子達に天使のメッセージを伝えたでしょう。そして弟子達はガリラヤに行きます。そこでイエスにお会いします。でも、そのことも含めて、これからイエスが為さる様々な働きについて、弟子達のイエス経験について、マルコは、自分の小さな本に閉じ込めようとは思わなかった。いや、それだけではなく、先立って行かれるイエとの物語は、「福音書」を読む読者が、それぞれに自分で経験して行くことである、そのことを彼は確信していた。だから、それぞれが自分のこととして、この物語の続きを経験するように、「あなた方自身がこの続き—(先立つイエス様との物語)—を書くのだ、だから私はこのイエスの物語を閉じることは出来ない」、そう言いたかったのではないでしょうか。これが、マルコが８節の一見中途半端な形で自分の「福音書」を終えている意味ではないでしょうか。

それはつまり、私達も先立って行かれるイエスにお会い出来るということです。私は、私達の希望は、自分がイエス様の御手の中で生かされている—(星野富弘さんが「立っていても、倒れても、ここはあなたの手のひら」という詩を作っておられますが)—そのことを信じることに懸かっていると思います。「どうして自分にこういうことが起こるのか」、そう思う時もあります。しかし、そこも主の御手の中である、そこにも先立つイエスがおられる、それを信じる、それがキリスト者の生きる姿勢であるし、そこにこそ、私達は希望を見出せるのではないでしょうか。

ニュースキャスターであられた山川千秋という方を覚えておられるでしょうか。山川さんは、番組の録画中に突然声が出なくなりました。精密検査の結果は、喉の癌でした。医者は奥様を呼んで癌であることを告知しました。奥様は後に述懐しておられます。「ガツンと頭を叩かれたように、突然目の前が真っ暗になり…身体がこなごなに打ち砕かれたような感じでした。家の中では子ども達に涙を見せることが出来ませんでしたから、夜、家を抜け出して街をさまよいながら、泣きながら考えました。ところが考えれば考えるほど、残された子ども達と生きるよりも、主人と一緒に死にたい、ここまま車に撥ねられて死んでしまいたい、ということばかりでした。結局、家に戻り、祈り続けました—(奥様はクリスチャンでした)。するとイエス・キリストの声が聞こえてきました。『わたしが、力を与えます』。その言葉に、私は２人の子どもと生きて行く決心をしたのです」。

奥様は、入院中の山川さんを訪ね、癌であることを伝えました。山川さんは55歳、子ども達は中学生と小学生です。山川さんは、悩むだけ悩み、苦しむだけ苦しみました。そして奥様の通う教会のドイツ人宣教師の訪問を受けました。山川さんは言いました。「先生、私は死の準備がありません。どうか私を救って下さい」。そして山川さんは、宣教師を通してイエス・キリストの十字架による罪の

赦しと復活による永遠の命の救いを信じ、病床洗礼を受けました。その後、アッという間に召されて行きました。

しかし、山川さんは素晴らしい希望に溢れた手紙を家族に遺しました。ご長男宛の手紙です。「…お父さんは病に倒れたが、そのことによって主イエス・キリストを知った。それは、素晴らしいことだと思わないか。父親を亡くした君の人生は、平坦ではないが、主イエス・キリストにたよって生きれば、素晴らしい人生が与えられる…また天国で会おうぜ…」。

奥様に宛てた遺書にはこうありました。(抜粋です)。「私はあなたにめぐり逢えたことに、あなたに…永遠に感謝します。このように計画された神に感謝します…私に、主に対する信仰をうえつけてくれたことで、あなたに感謝します…私は、主の愛の中に新しく生き、あなたを待ちましょう…ありがとう…心からありがとう。二人の息子を残されて、これからのあなたの人生は、決して平坦ではないことを知って、つらい思いでいますが、道は必ず開けます…なによりも、あなたがた三人には、主イエス・キリストの衣があるではありませんか。感謝と、励ましと、愛をこめて」。

55 歳で死を突き付けられた山川さん、しかしその遺書は、神を呪うでもない、人生を呪うでもない、運命を呪うでもない、怒りも絶望の叫びもなく、感謝と励ましと愛に溢れていました。希望の輝きがありました。なぜでしょうか。山川さんもまた、先立つイエス・キリストに出会われたのです。イエス様から、励ましを、希望を与えられたのです。

私達も、色々な形で先立つイエスを経験出来るのではないでしょうか。それを信じて待望するように、それがこの箇所の、マルコのメッセージではないでしょうか。申し上げたように、私達の現実には、困難の中で生きておられる主を感じられないこともあるでしょう。弟子達もそうだったのです。しかし神様の計画は、弟子達が十字架で絶望するところでは終わっていなかったのです。神の計画には、絶望の向こうに主の復活があり、新しい使命に生きる弟子達の姿があったのです。私達に対する神のご計画も、きっとそうです。絶望するところでは終わっていないのです。聖書は「希望は失望に終わることがありません」(ローマ 5:5)と語ります。神の計画は、私達の思いより遥かに深い。私達はそのことを信じるのです。先立って行かれるイエス様を信じて、主の導きを信じて、主との出会いを待望して、この信仰生活を歩んで行きましょう。主が生きておられます。